

上田敏博士の追憶

高倉 輝

上

早いものでもう上田先生の一周年が来た。不思議な事には、上田先生が亡なられた一年前の七月十三日は丁度私共がこちらの文科を卒業して卒業証書を貰ったその当日だったのである。そして、私は今必死で先生の遺稿ダンテ「神曲」地獄篇の校訂をやつて居る。色々の事が憶ひ出される。

亡くなつた人の記憶も一周忌を越すと変らずには居ない。一年の間はまだこないだまで生きて居た人が死んで了つたと言ふ感じが主である。一周忌を越して見ると俄に遠く離れた思ひがする。もう此の世に居ない人だと言ふ冷たい感じが完全になる。直接その人に対する記憶が次第に薄らいで、一皮へだてゝ唯だ名前だけの記憶に触れてるやうな、それすら次第に薄れて行くやうな、何とも言へない果敢ない感じがするのである。

「うづまき」の中に、ふと午睡の夢から覚めて、秋の夕陽のあかあかと障子に映るのを眺めた少年の悲しい気持が書いてある。「独語と対話」には

「街並木にも蔭が出来た。水菓子屋の日覆が新んしくなつた」

とある。「現代の芸術」の一節に、秋晴の夕方に聞く豆腐屋喇叭のがひいてある。

上田先生はやはり詩人で有つたと思ふ。そして、日本の伝統ある都会人の生活を遺憾なく受け継いだ好箇の典型であつたと思ふ。

藤村氏の「春」の中に、福富のひいた「少年の時はめでたきものなり、人世の五月も歡ばしきものなり、されど学芸はそれよりもめでたく、知識はそれよりも歡ばし」

と言ふ法王ピウス二世の言葉を同人の間で問題にする所がある。私共より一年さきに入学した文学科の学生は、先生の講義の第一時間目に凡てあの羅句語を暗記されたものである。

いつまでも若さを失ひ得ぬが為に、常に一種の悶えを持つて居たと思はれる先生の姿を思ひ起す時、遇然ならぬ感じがせられるのである。

「私は何より音楽をやらなかつたのが残念だ。今五年若ければ、きつと初めて居る所だが」

かう言ふ先生の言葉を私は幾度も聞いた。今は露西亜で音楽をやつて居る私の友人の宅が岡崎にあつた。そこへ私が先生を案内した事がある。京都の音楽通で有名な高等工芸の本野精吾氏が御一緒で有つた。たしか、ショペンの話のはづんだあとで有つたと思ふが突然先生か真面目な顔をしてかう言ふ意味の言葉をもらした時には私は愕いた

私は之を芸術家にならなかつた芸術家の悲痛な告白だと思つて居る。

(『読売新聞』1917年7月13日)

中

直接文壇の表面に表れた博士の功績として先づ第一に挙げられるのは、詩の翻訳で有る、此の点は、単にその紹介に依つて日本の文壇を啓発する大功が有つたのみならず、翻訳そのものが芸術品としても立派なものである所が、戯曲界も一時は凡て「一幕物」一冊から生れ出たやうな観が有つたが、詩の方に於ける「海潮音」の位置はそれ以上である。この方は仏蘭西語に堪能な人の少い所為も有つたらうが、いつまでも博士の独舞台で有つた。

しかし、博士の翻訳にも色々の変化が有つた、その変化のあとを尋ねると、一々詩壇の変遷と関連する所が有つて甚だ興味が深い。それは何れ他の機会で述べたいと思ふが、唯だ最も面白いと思ふのは、前には博士の訳に依つて其の眼を開かれたと思はれる、北原白秋氏の作品がかへつて後には博士の訳に影響を与へて居る事である。

ながれのきしのひともとは
みそらのいろのみづあさぎ
みづことごとくくちづけし
はたことごとくわすれゆく

は「わすれなぐさ」の題名の起原となつたらしいが、しかし「海潮音」の白秋氏に及ぼした影響は要するに一時的のものだと言へよう。氏が自分のものを引き出す為の準備を完全にする為に役立つだけである。それから自分の道である。そこまで行くとこんどは却て博士の方から学ぶ様になつたのは、要するにそこか芸術家の強みで有らう。

両替橋花市の晩、風のまにまにふはふはと、夏水仙の匂ひ土の匂ひ、……………

花はゆかしや。道行く人の、裾に巻つく足へもからむ、道行く車の輪にからむ。

と言ふやうな「両替橋」、それから

……………

いやいや浜風むかひ風、涙なんぞは乾いて了ふ。

えい、それではいつもいつまでも、思ひ続けて忘れまい。

……………

と言ふやうな「わかれ」が

……………

え、舟は櫓でやる、櫓は唄でやる、唄は船頭さんの心意気。

雨は降る降る日は薄雲る、舟は行く行く帆が霞すむ。

と言つたやうな白秋氏の「舟唄」と一緒に「まんだら」に載つて居るのは面白いことである。

いつで有つたか英文学会の席上で、博士自身もゼルハアレンやマアテルリンクの話から「欧羅巴で少し評判になり出すので、日本への詩はまだ若い一青年文士に過ぎないが、暫くするといつの間にか大家になつて了ふので、紹介した自分が何だか非常につまらなく淋しい感じがする」ともらした事がある。

(『読売新聞』1917年7月14日)

下

博士に驚嘆す可きは、の鑑賞眼の限りなく広く、深く、鋭い点である。古今東西凡ての芸術を残りなく貪つて、宛も今創られたものゝ如くに読みこなして、いかな零細の末までもその味を味はひ盡さずにはおかないと言ふ観が有つた。日本文学に対する博士の識見は源氏物語の批評一つを以ても之を知る事が出来る。外国文学の研究者の身を以て「小唄」の上辞をやつたなどもその例である。

Summer is icumen in ……………

の英語の中世バラッドも、博士の口から聞いて始めてその真の味が分つたやうに私共は思ふのである。私共が三年の時の演習にドクタ・ジョンソンの「プレイズ」を使つたが、いくら字書を引いても参考書を検べても分らぬあの難解の文章を、「これはしたり、奥さん、あなたにそんな飛んでもない……………」と言つたやうな軽滑自在の口調で訳をつけられた時には、博士の語学の力にも驚いたが、今更ながらその読書力に驚嘆して聞き惚れたもので有つた。

私が今つくづく博士の口から聞いたかつたと思ふのは、仏蘭西文学史の講義である。

私が初めて上田先生にお眼にかゝつたのは、私が三高の三年の時文学会の幹事をして居た時で有つた。私共はその年の文学会の第一回の例会に講演をお頼みに岡崎の宅へ伺つた。その前年の文学会の大会に、「白耳義の一詩人」と言ふ題で先生のゼルハーレンの紹介が有つた。その時は、今広島の高師に居る出野青煙君や、それから元文章世界の投書家で有名で後に朝鮮で悲運な最後を遂げた上田破夢天君が幹事で有つた。私共の代になつて都合三度三先生に講演をお頼みしたと記憶して居る。その二度目が「最近仏蘭西文壇」と言ふ題で此時私共は初めてロマン・ローランやアンドレ・ジイドの名を聞いた。

その前年で有つたと思ふが、「新小説」で小評論と言ふ一欄を創つて、生田長江氏がその選者になつた事がある。私はそれまでついぞ投書といふものをした事がなかつたが、その頃長江氏の評論を愛読して居た関係からふと投書して見た。その時春陽堂から貰つた図書切手で買った本の中に「芸文論集」がある。あの本から私が受けた読書上の指針ほどの位大きいかわからない。今でも私の持つて居るあの本の巻頭には「春陽堂懸賞の證」と言ふ大きな判が押してある。先生の遺書の中から数冊を私は自分の手に入れる事が出来たが、まだどれれもどれれも読んで居ない。僅かに Longus の "Daphnis et Chloe" を終りのグロツセールを頼りにして半分程よんだだけである。此の書の初めには先生が巴里在留中の署名がある。

私が本当の意味で教へを受けたと思ふ日本人が二人ある。それは森鷗外博士と上田先生である。鷗外氏にはお眼にかゝつた事はないが、その著書は零細のものまでそろへて愛読して居る。従つて鷗外氏から受けた影響はその著書からである。上田先生の場合は、その著書よりもむしろ先生の傍に居たために受けた影響が主である。だから先生の死に依つて受けた私共の損害は一層大きく思はれた。殊に私の場合は、自分の身勝手な性質と、それから今一つ自分で英文学を専門にやる気が無かつた為とで、先生の講義もなまけて出ない事が多かつた。今から思へば、かうして殊更に先生に近づく機会を失つたのが何より残念である。

私共が一年生の時、卒業生の送別会を三本木のあづまで開いた事がある。その時は先生が初めての病気がいくらかよくなつた時で有つたが、その席上のあいさつの中に「自分も京都へ来てもう可なり年月になるから、もう何か為事らしい為事をする積りで居るが」といふ意味の言葉が有つた。その為事と言ふのはどう言ふ意味で有らうかと思つたが、遂に知る事が出来ないで先生は死んで了はれたのである。 (七月八日)

(『読売新聞』1917年7月15日)